
東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚形成史

Relationship between Marine Environment in the Holocene and Jomon Shell Middens in the Tokyo Bay Area, Central Japan

樋泉岳二

【要旨】東京湾地域における完新世の古海況変遷と縄文貝塚形成史について概観した。両者の関連には以下の諸特徴が認められる；(1)本地域における貝塚の形成は有楽町海進開始直後に始まる；(2)海水準上昇期に相当する貝塚は少ないが、以後の海進によって水没または消滅している可能性も高く、その実態は不明な点が多い；(3)海進最盛期に入ると貝塚は急激に増加し、貝類資源は縄文人の生業・食生活の中に定着した；(4)海進最盛期～海退期の貝塚動態を見ると、海水準の安定期（縄文早期末～前期末，中期後半～後期前半）には増加，低下期（前期末～中期前半，後期後半～晩期）には減少を示しており、両者の間にはかなり明瞭な相関がある；(5)海水準安定期における貝塚の増加は湾の埋積による干潟の拡大と貝類の生物量の増加に呼応したものと見えるが、環境条件が満たされていても、貝塚形成が低調な場合もある。これは縄文人たちの生業－住居様式，交易システムなどの地域差によるものと考えられる；(6)海水準の低下期には、干潟の縮小や沖方向への後退などが貝塚衰退の一因となった。しかし、海退期には海面低下の開始と共に様々な環境変動が同時多発的に生じている。こうした環境史上の動乱が縄文社会の人口減少，居住様式の変化などを引き起こし、結果的に貝塚の衰退へとつながった可能性も考えられる；(7)縄文人の食性に占める貝類資源の位置は、縄文早～前期には付加的要素にとどまったが、以後次第に比重を増し、後期には主要資源の一翼を担うに至った；(8)貝類への依存度の増大につれて、前期には捕獲圧の影響を示唆する事例が現れる。捕獲圧は、中期の東岸域で顕著となったが、後期に入ると次第に緩和されていった。これは主として干潟の拡大と資源生産の増大によるものと推測されるが、後期には人間社会の側にも資源の保全に関わる観念・習慣等が成立した可能性が強い。

1. はじめに

縄文海進に伴う海岸線の増大と沿岸浅海域の拡大は、内湾生態系の発達と生物量の増加をもたらした。旧石器時代にはほとんど顧みられることのなかった海産資源という新たな食料資源の開拓を縄文人に促した。貝塚は、そうした縄文人たちの海との関わりの様子を示す有力な証拠物のひとつである。

貝塚とは、狭義には人間が捨てた貝殻が堆積したもの（人工的な貝層）を指すが、広義には貝層を伴う遺跡の総称でもある。貝層の規模や堆積状況はさまざまだが、縄文貝塚の場合、放棄された堅穴住居跡などの遺構中に堆積したもの（遺構内貝層）、および集落内外の空き地に堆積したものが一般的で、後者はしばしば大規模に形成される。

縄文時代の貝塚は、縄文早期以降、太平洋側の内湾沿岸をはじめとする全国各地の沿岸部・河川下流域に形成されている（図1）。しかし、その分布密度や規模、貝層を構成する貝の種類にはかなりの時代変化と地域差が認められる。こうした相違が各時代・地域ごとの海岸環境の違いを反映